
I S 織斑家の弟

黒陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 織斑家の弟

【Nコード】

N3514V

【作者名】

黒陽

【あらすじ】

IS篠ノ之家の弟とは違った方向性で書いてみようと思ったので書いてみた作品です

プロローグ

僕は、死んでしまったらしくそれは神様の手違いだったからと言う訳でもう一度新しい生を与えろと言われそれに伴って何か特別な能力をくれるらしいけどそれに対して僕は何もいらないと答えたがそれでは申し訳無すぎると言い換えられてしまったのでそれならと

瞬間記憶能力を頼んだ。でもそれ以外にも何かないかと言われたが特に思いつきもなかった。そういえば僕は、どんな所に転生するのか教えてもらっていなかった。その事を聞いてみたが

“IS インフィニットストラト”の世界と言われたがまったく分からなかった。なので簡単にどんな場所なのかを聞きそれならばと思

ISが僕にも使えるようにと僕でもそのISのコアを作ることができると後は、瞬間記憶能力と一度見たものを忘れないようにしてほしいと頼み。許可がでた。そして、そのまま僕の意識は途切れていった。

第1話

僕が、この世界に転生してから数年が経った。僕のこの世界での家族は、織斑千冬と織斑一夏の二人のお兄ちゃんとお姉ちゃんだけだ。何でお父さんとお母さんはいないのかと前に聞いてみたがぜんぜん教えてくれなかった。それでも姉さんと兄さんがいれば僕はいいと思っていた。

それでも、最近は姉さんは家に帰ってこない日が多くなった。実質僕と兄さんを今養っているのは、姉さんだ。そのせいで姉さんは仕事が忙しいのだと僕は思った。でもどんな仕事をしてるのかと前に聞いたが教えてくれずに

「命が気にする必要ないぞ」

っただけ言われてしまった。普通ならそんなこと子供が知らなくても大丈夫だといった感じなのかもしれないがこのときの姉さんの雰囲気は自分に関わらせないようといった雰囲気だった。僕は、まるで遠ざけられているような気がしてしまいただ。

「・・・わかった」

っただけ言い姉さんが家に帰ったときに返事をした。それから姉さんに嫌われたくない思いでいい子になろうとがんばった。勉強もがんばったし家事も一夏兄さんに教わりながら覚えたり少し前までいた。一夏兄さんと同級生の凰 鈴音の鈴お姉さんにも少しだけ教わった、ただただ姉さんに褒めてもらいたいと思った。

たまに家に帰ってくるお姉ちゃんに言うが全然褒めてもらえなかったといよりは全然聞いていないかのような状態だった。それは、僕がまだいい子じゃないから褒めてもらえないと思ひ。さらにがんばった。あるときそんな僕のこと見かねたお兄ちゃんが

「なあ命？何でそんなに無理ばかりするんだ。そんな無理ばかりすればお前が倒れちまうぞ」

僕のことを氣遣ってそう言われたので僕は、何でがんばるかの理由を言ったら僕のことを思いつきり抱きしめて

「ごめんな・・・氣づいてやれなくて。本当にごめんなお前に無理ばかりさせて。お前は、いい子だからもう無理をしなくてもいいんだ」

顔は見えなかったが声が震えていた。まるで泣きそうな声でただ泣かぬように今まで無理をしいい子になろうとがんばった自分の弟の頭をなでながら謝った。

「お兄ちゃんどうしたの？」

「何でもないからな・・・今度ちゃんと千冬姉には俺から言っておいてやるから」

そう言った時自分のまだ幼い弟は、本当に嬉しそうな顔をした。その顔は今まで見たことなかったとして、自分がいままでどれだけ弟のことを見ていなかったのかを思ひ知った。それから少ししてからも命は、手伝いをやめなかったが前ほど無茶はしなかった。

でも、ある時一夏が命におつかいを頼んだ。その帰り道命は、事

故にあった。それを聞いて一夏は、すぐに運ばれた病院に行くところには、痛々しい姿の命の姿があった。包帯で巻かれ点滴の針を刺されているその姿を見て力をなくしその場に座りこんでしまった。

その後なぜ事故にあったのかの理由を聞くと通行人を姉と勘違いし道路に飛び込んでしまい轢かれたと聞かされた。そのことを言い終わった医師は、一夏に対して

「こんな時に失礼だが君のお姉さんは何をしているんだい？あの子がこんな状態なのに」

「……すみません。俺も姉さんが何をしてるのかはわからないんです」

自身も前に何度何をしているのかを聞いたことがあるが絶対に教えてくれなかった。あの時は、なんとも思わなかったが今は怒りを感じた。命がこんなことになってるのに何で来てくれないんだ？どうして連絡してもでてくれないんだ……。一夏は、今まで自分の誇りでもあり自慢の姉に始めて怒りを覚えた。世間では”ブリュンヒルデ”といわれている姉に対して初めてそう思った。

「それで命は、助かるんですか!？」

「命は、取り留めたが……。右目は駄目でしょう」

そう医師に言われると絶望したような表情に一夏はなった。

「ど、どうしてですか!！」

「事故の時の破片が右目に刺さってしまったので……。どうする

「こともできません」

医師の言葉は、一夏にグツサリと突き刺さってしまい医師もこれ以上今の一夏に言えることはないと思っただのかとあえずは明日またお話ししますと言いつつ保護者の方を呼んでおくださいと言われたがその言葉も今の一夏には届いていないようで放心状態になつたままだ。

なぜ自分の弟がこんな目にあわなければいけないんだ？なぜあんなにいい子になろうとがんばっていた命がこんな目にと考えを巡らせたが何もいい答えは出ずに今自分の目の前にいる痛々しい状態の命を見てどうにかしてやらないとだけ思った。どうせでてくれないと思っただが一夏は、千冬の携帯に連絡するが電源がはいってないよつで通じなかった。せめて仕事場の連絡先だけでも教えてくれればつなげたのにと悔やんでいた。

第2話

僕は気がついたときは白い天井で消毒液の独特なおいがする病室だった。僕は、はじめなんでここにいるのかと考えたが次第に思いついてきた。僕は、事故にあつてここに運ばれたんだ。お姉ちゃんとも見間違えて飛び出して轢かれるなんて僕は何をしてるんだろうか。そんなことより僕の視界がなんだか違和感があった。僕が自身の目を触ろうとしたとき病室のドアが開き看護婦さんが僕が起きているのを確認するとすぐに医師を呼んだ。

「どこか痛いところはあるかい？」

僕のことを治療してくれた外国人のお爺さんの医師がくるとまず僕にそう聞いてきた。

「……いえ。特に痛みはないですけど目に違和感があります」

そこで医師は少し考え込んだようだが先ほどよりも真剣な表情になり

「よく聞いてくれるかな。君の右目は事故で見えなくなってしまうんだ」

「……そうですか」

僕は、ただそう言うだけしかできなかった。自分の右目がなくなってしまう事にはあまり関心がないかのように言うがそれよりも

「すみません。僕のお姉ちゃんは来てくれましたか？」

僕は、そのことが一番気になった。

「……いや。君のお姉さんはまだ来ていないがお兄さんは来ていたよ。お兄さんが何度かお姉さんに連絡をとろうとしたんだが連絡がつかなかったらしい」

やっぱりお姉ちゃんは来てくれなかったんだ。

「それで、こんな時にこんな事を聞くのも何だが……君達の両親はいないことも聞かせてもらったが今の君達の保護者は君のお姉さんでいいのかな？」

今の僕の保護者？そんなのもうわからない今回のことで僕は、捨てられたっと思ってしまった。いや、前々からそう思っていた。いつもお姉ちゃんは、一夏お兄ちゃんの事しかみてなかった。僕のことなんか目にもくれないようにだから

「……僕には、保護者はいないです」

そう言ってしまった。

「そうか……。もし君がよければだが私の養子ならないか？」

そのお爺さんがそう言うとは僕は、ただ頭を縦に振りうなずいた。

「なら。後は、私たちでいろいろと手続きなどをしておくから今はゆっくりと治すといい」

「……わかりました」

僕がそう返事をするとお爺さんは、優しそうな笑みを浮かべ病室を出て行き僕は看護婦さんに包帯を取り替えてもらった。

それからしばらくして一夏お兄ちゃんとお爺ちゃんがいろいろと話をして僕は正式に養子というよりは、一時的にこちらで預かる事ということになった。その際の話し合いの場にもお姉ちゃんはこなかったらしい。さらに少しした僕とお爺さんは、アメリカに行くことになったというよりはお爺さんがアメリカに帰るので僕も一緒に行くことになったただけだ。その際の見送りに一夏お兄ちゃんとその友達の弾さんが来てくれて

「いつでも戻ってくればいいからな？」と笑いながら言っていたがどこか泣くのを耐えているような感じがしたが僕は、ただ

「バイバイ」

っただけ言った。その後は、飛行機に乗るために移動したが後ろから泣き声が聞こえた気がしたが僕は決して後ろを振り向くことはなく歩いた。

僕がアメリカに来てから目がぐるしく僕の生活は一変した。まず学校に入学するために試験をすることになったが何をお爺さんは思

ったのか試験問題がどう見ても小学生クラスの問題ではなく大学レベルの問題がだされたがそれを黙々と解いたらとても驚いた。どうやら冗談半分でだしたらしいが解かれるとは思わなかったらしい。それからというものは大学に通ったが好奇心な目線もあつたが敵視する視線も多くそんなことに耐えたくもなかったのでお爺さんを通じて学長に無理やり卒業用の論文を出した。その内容はISについての物でそれが評価され通わなくても卒業したことにする事になった。

お爺さんがここに多くの援助してくれていたおかげでだいぶ助かった。それから少しし軍のえらい人たちが家を訪ねてきた。

「フランク、久しぶりだな」

「そうだなセグンド。ところでお前が家になんのようだ？ただ昔話をしにきたというわけではないのだろう」

「ああ・・・単刀直入に言うがお前の息子を軍で働かせてみないか？」

そこでお爺さん（フランク）がそのことに対して反応をしめた。

「なぜかな？一応はこの子は私の息子というよりは預かっているだけだ」

「そうだな。その子のだした論文を読ませてもらって今のうちからこちらの事を少しでも理解してもらいたいということだがそれでは駄目か？」

「ふむ……。とにかく私はこのことに対してはどんごんごん言っ
とはできない。最終的にはこの子が全部決めることだ」

そう言うと二人は僕のほうを真剣な表情で見ると

「ミコト君は、どうしたいかな？」

「別に断ってくれてもかまわないよ」

僕は、さっきから考えていたこれから僕はどうしていくべきかを
・・そして僕が決めた答えは

「僕は、そのお話を受けます」「おお！受けてくれるか」「ですがいく
つか条件をつけさせてください」

「なんだい？何でも言ってくれ」

少し興奮したような状態になったセグントさん。

「まず一つに僕にアメリカ国籍をください」「それは何とかなるな」
もう一つは、僕に將軍の地位をください」

「「！！！？？」」

そう言うとさすがの二人は驚いたような顔をしたといよりは驚い
ている

「それは無理があ」「もしもそれをすべて承諾してくださるのでし
たら僕はコアを作ってみせます」・・それは本気で言っているのか

「？」

先ほどの優しかった口調というよりは本来の軍人としての口調になった。

「もちろんです。もしもできなければ好きに扱ってかまいません」

「わかった」

そう言つと携帯をだしどこかに連絡をとっている。お爺さんのほうをみるとすごい笑っている。はて？僕は何かおかしいことをしたのだろうか？

「すまないが今日はこれで失礼するよ。これから会議をすることに なったそれとミコトくんやはり君はそのフランクの息子だなその馬鹿と同じようにとんでもない事をいきなり言い出すところはそ つくりだよ」

そう言つとセグントおじさん？は外に止めていた車に乗ると急いでいってしまつたが制限速度は守つたほうがいいと思つよ？とお爺さんに言つとさらに笑っている。

「それよりお爺さん？あのセグントおじさんってそんなに偉い人なの？」

「ああ。あいつか？あいつはあれでも將軍だぞ？」

え？そうだったのですか。だからいきなり会議をするために招集することができたのか。

「お爺さんも昔は無茶したの？」

「ミコト若いうちはとにかく無茶なことしておけばいいんだよ。それにしてもミコトは私より無茶苦茶なことをするなあ。昔の私ももう少しは控えてたがな」

そう言い昔の自分の武勇伝をいろいろと教えてくれたが貴方は本当に人間ですか？と聞きたいことが多々あった。

第3話

あれから数日してセグントおじさんから連絡があり戸籍のほうはすぐにでも用意するということが伝えられたが地位のほうは結果をしたらになった。それは、至極当然だと思った。それして、僕はセグントおじさんが用意してくれた研究所に連れていかれそこでコアとISの製作にとりかかった。従来のISは、コストが掛かりすぎていると常々僕は思っていた。ISはスポーツと世間では言っているがあれは完璧に兵器だ。

そんなものに求められるのは低コストでそれなりの高性能であるべきだと思っている。さらに現在のISは欠陥機だとも考えているなぜかって？それはもちろん女性にしか扱うことができないからである。なぜ篠ノ之博士は作ったんだ？天才といわれているあの人なら男性でも扱えるものを作れたはずだま、そんなこと考えてもしかたないですね。僕は、僕の知っている知識のなかで低コストになりそうな機体を考え設計図を描いた。

一応本物のISコアを見てみようと思いきセグントおじさんに頼み見せてもらった時ISが僕に反応して起動してしまった。それを見るとおじさんはこのことはまだ秘密にしておこうと僕に言ってきた僕はそれを了承した。そして、過去の第1回IS世界大会の資料を見たとき総合優勝および格闘部門優勝者の所に自身の姉の名前を見つけてしまった。その時の表情はとても冷えきったような目をしていたとそれを見ていた兵士は語った。

それからというものは何かにとりつかれたかのように一心不乱にISの製作をした。それから1週間たちや々と完成した。一応その

現物をセグントおじさんに見せるとすぐに重要人物たちを集めるから説明してもらおうということになった。僕は、広い会議室に連れてこられるとすでにその場所にはこのアメリカで重要人物たちが集まっていた。

「急な私の呼びかけにに応じてくださりありがとうございます。本日呼び出してしまったのは、先日話した物がついに完成したからだ」

そう言うとおおと言った声が上がった。

「では、すぐその製作者に完成品の説明をしてもらおうか」

「わかりました、大統領。では、ミコト君説明を頼むよ」

そう言われ僕が前に出るとやはり驚かれたが大統領と言われた男の人は微動だにしなかった。さすがこの大国をまとめている人物だと思った。

「では、まずこの機体ですが僕が一番注目したのは従来のISはコストが掛かりすぎていると思いました。そのためこの機体は、コストを抑えさらに機動力も現在配備されている第二世代より上です」

そう言う今回1機を開発するために掛かった費用を提示しさらに現在配備されているISの1回の整備に掛かる費用をだした。それを見た政治家、軍人は驚きの声を上げた。コストパフォーマンスは十分なようですな。

「さらにこの機体はワンオフ・アビリティーは使用できませんが男

性も使用可能になっております」

その言葉を聞いたこの会議室にいるセグントおじさんを除く全員が驚愕した。本来ISは、女性のみしか扱うことができない。それなのに今回開発された機体は、男性も使用可能になったものだ。

「ふむ……。大体の事はわかったがこの機体はすぐにも量産可能なのかい？」

「もちろんです。すぐにも量産は、可能ですが大統領」

「何かね？言ってみなさい」

「量産は、するのは賛成なのですがしばらくはこの機体のことは極秘にしておくことがよろしいかと」

「なぜかね？」

「変なタイミングで発表すれば他国がこちらに技術開示を迫ってきます」

「確かにそのとおりだな。ならば君ならどうするのだ？」

「それでしたら。こちらのデータをご覧ください」

命がそう言うとうとうやって調べたのかそこには現アメリカ軍の女性を中心とした部隊のいくつかが同時にクーデターを起こそうとしていることがわかった。現大統領は、女性だからといって優遇など

をしない人物でその人物の能力で評価する人物だもちろん努力した者にもちゃんとした評価をくだす人物で国民にも人気がある。

「ふむ・・・つまりこの者達がクーデターを起こしたときにこの機体を使って鎮圧するということでもいいのかな？」

「はい。そうです。このクーデターに参加するであろう部隊の武装ははっきり言って1国落とすことが可能だと思います。だからこのときに迅速的に鎮圧すれば世界にもこの国の力を示すことができると思います」

たしかにそのとおりだと軍人は納得し政治家達は、今後の利益を考えれば賛成した。大統領自身もこれには賛成した。そして、クーデターが起こるその時までにはまずは圧倒的な数をそろえすぐに鎮圧しなければならぬと考えていた。

「では、これをもって君を将軍としての地位を与えよう異論がある者はいるか？」

「ふむ誰もいないようだ。所でこの機体の名はなんというんだ？」

「この機体の名前は”ラドウン”と言つ名にしております」

「”ラドウン”かギリシア神話に登場する黄金の林檎を守っていたドラゴン・ラードーンからとつたということか」

「それともう一つだが戸籍のことだが名はそのままでもいいのか？」

僕は、どうしようかと悩んだ時もあったがもう何も未練はない。

「なら僕は今から名を”ボルキユス”と名乗ります」

そう宣言すると会議室から拍手が起こった。

「わかったでは、すぐに動いてくれ”ボルキユス”将軍」

「はっ！」

この時僕は最初の1歩を踏み出せた気がした。これで無理にいい子を演じていた自分と別れることができた気がした。

第4話

ある日アメリカで大規模なクーデターが起こった。クーデターを起こしたのは女性中心というよりは女性のみで構成されたISが配備された部隊とそれを支持する陸、海軍の軍人達だ。彼女たちはまずアラスカ基地を武力による占拠そして政府に対し何を考えたのか現大統領と男の政治家達の辞任を要求した。

現在のアメリカ政府の方針は実力主義だがその方針にISの扱える女性達の大多数が不満を持っていた。そしてついに我慢の限界がきたそれは、ついこの間報道されたニュースに原因があった。”日本の男子学生がISを起動した！”””といった報道がありもしかしたら自国でも男がISを起動させ自分達の地位や立場が危うくなると思ったのだろう。

今まではISに乗ることができるといった事で好き勝手やってきた者も多くいるがこの事件のおかげで対等になってしまっいや、それどころか自分達が下になってしまっと感じたのだ。現政府は、男性政治家が9割近く占めているためこのような要求を政府につきつけ女性につごうがいい国にしていこうとした。

だが、この要求にたいしアメリカ政府は

「彼女達は、すでに我が国の兵士ではなく。ただのテロリストとして認識する。そして、我が国はテロには決して屈指はしない!!!」

つと堂々と宣言した。その姿を見てさらに国民からの支持率がよくなったとかそれはさておき。その反面この状況をどう鎮圧するのかの方法を聞きたいらしい記者達はどういった方法で聞こうかと考

えてもいた。今この事件は世界に対して報道されている。

「大統領。このクーデターはどういった方法で鎮圧されるおつもりなのでしょうか。クーデターを起こした部隊の戦力はISが45もありさらに巡洋艦3隻戦車も複数だと報じられていますか」

一人の記者がついに聞いた。政府は、彼女達の戦力をすべて公開しておりその事に最初はどこの国の記者も驚いていた。普通であればそんな情報は教えられもしないものだからである。

「その質問の答えだが至って簡単なことだ。テロリスト達は、すべて殲滅する」

そう大統領が宣言すると会見の会場は一瞬にしてしずかになりその中にいた女性記者達は笑いをこらえようとしたが何人かは笑い出した。そんな中各国の男性記者は、まじめな表情になった。

「だ、大統領それは本気でおっしゃってるのですか？ISですよ？それも45機もアメリカが保有しているISのほとんどが敵になってるのですよ」

そう言った記者もやはり女に男が勝つき？と言った言い方だったがそんなことはお構いなしという態度で話を続ける

「ほう。貴女は、我々が勝てないとおっしゃりたいのかな？」

「失礼ですがそのとおりです」

「では、これから起こることをしっかりと見ておくといい」

そう言つと急に今で後ろにあつたモニターがつき映像が流れた。その映像は、現在占拠されているアラスカ基地が映し出された。それと同時に

「……始める」

その声が聞こえたがそれはどういう意味なのか理解できなかったのか誰も質問をしなかった。

s i d e 命

ところ変わって

「……さてやつと大統領からの支持がきたな」

現在僕は、自身が作った。第二世代機ラドゥンを中心とした大隊を率いて鎮圧に向かっている。

「ああ。久方ぶりの戦場の空気ですなアイレス殿」

「そうだな。バデス主席將軍補佐官殿……ああベトナム戦争以来

だ
」

軍の圧縮のせいで退役していたアイレスさんとバデスさんを僕は、何とか説得してもう一度軍に戻ってきてくれないかと頼んだ。どちらかというと僕が説得というよりはセグントおじさんが説得したと聞いていいですが。僕がなぜこの人たちを呼び戻そうとしたのかというとそれは至極簡単なことで本当の戦争をしっている人だからでさらにセグントおじさんが一番押し込んだ人たちだからだ。

「將軍そろそろ敵を目視できる距離まできました」

真面目そうなといよりはクールな女性といったほうがいい現役軍人のイオ大佐だこの人は、こんな世界のなかでもちやんと周りを見ることができ優秀な人物だったため大佐の部隊ごとスカウトした。

「でも、本当に馬鹿ですよねボルキユス將軍」

「ニケあまりはしゃぎすぎない」

「もお〜レトは真面目すぎるよ」

「ニケ少しはレトをみならいなさい」

「大佐までそんなこと言うんですか〜」

ニケとレトは、イオ大佐の部隊にもともといた隊員達だ。

「お喋りは、ここまでにしておこう」

「「「「「はっ！〜！」「」「」「」

僕の一声で一斉に気を引き締めた声をだし返答をする。そして、僕が今率いている部隊をみた。現在僕が率いている大隊数はラドゥンだけです。84機だ。さらに僕の専用機の第三世代のヒュケリオン、ベルセボネこれはバデスの専用機でドラギアがアイレスの専用機。

さしてニケにはギラトスこれはまだ第二世代だ。レトにはエルテームスを渡したエルテームスは、時間ぎりぎりにロールアウトしたばかりの機体のため今回はテストもかねている。そのエルテームスのパーツを使ってカスタムしたトロイアがイオ大佐の機体だがこの機体のカスタムはイオ大佐自身が行ったため僕ができたのは武器の製造だけだ。

「では、バデス久しぶりの戦場なのです。号令は任せました」

「はっ！ありがとうございます」

そう言うとバデスは笑みを浮かべ全軍に対して

「ではみなさん野獣になりましょう！！」

その一声で全軍が行動を開始した。まず散会して3方向から攻めることになった。右翼がイオ大佐が率いる33機左翼がバデス、アイレス33機率いて攻めるそして中央が僕で19機。テロリストは急に現れたアメリカ軍にあわてたなぜ自国にあれほどのISがあるのかだがその機体はどれもみたくはないものだったためさらに混乱したがいち早くその場で指示をだして迎撃に出る。

「ふっん！！この程度ですか？」

「なぜ男がISを使えると!!」

「そんな些細なことはどうでもいでしょう・・・それより貴女達の実力はこの程度なのですかそうだったなら残念ですがここで死んでもらいましょう」

眼前にいる老兵が変なことを言ったことで不思議になった元アメリカのISパイロット。ISには絶対防御があり死んだりすることはないはずだと思いい目の前に全身装甲のISを使っている老兵を馬鹿にしたような目でみると眼前の機体が槍を突き出してきたのでそれを防御した。そして・・・絶対防御を貫通して分厚い装甲に槍が刺さった。

「へ？何で刺さるの!?こんなので聞いて・・・」

「さすが將軍からいただいた機体だ。お嬢さん一応教えておいてあげるとこの槍・・・いやここにいる部隊の近接武装すべてに”ブリュンヒルデ”だったかな？その者が使っていた”雪片”の特性であるシールド無効機能がついているそうだ。ま、これも弾数せいで10回が限界らしいみたいですが十分でしょう」

そういい終える老兵を怯えた表情で女性は見たそして

「た、たすけ」

「それでは、サヨウナラお嬢さん・・・」

そういいバデスは、自身の主力武器である槍についている内臓型マシンガンを撃ち貫いた女性に止めをさして。それを見た味方の士

気は、上がり対してテロリストと呼ばれた女性達は恐怖で顔を染めた。

そして、さらにまた一人また一人とアイレスに今まで虐げていた男達にやられていくその光景はバデスが言ったとおり野獣のように喰らいついた。その中でも何人かは投降したらしい

そして、それはイオ大佐が率いる右翼でもにたような状態だった。まずイオ大佐は、命が作った十字剣・クロスサイフォスを使い次々に落としていくそのイオを援護するようにレトがスナイパーライフルで援護する。ニケは、敵を捕まえ両腕で相手を押しつぶそうとしているこの攻撃によりろっ骨はすぐに折られすぐに降伏した。

何とかしてこの戦場から逃げようとした者は、一番手薄であろう中央に集まった。そこに集まったISは全部で4機だ。戦闘が始まってまだ30分もたっていないのにもうすでに戦車は全滅し巡洋艦はイオ大佐達により完全に大破した。そのためもうここに残っている4機しかない。女性達はこんなことになるなんて信じられないという顔をしながら中央の部隊つまりこの部隊の指揮官を倒してこの場から撤退しようとした。

彼女達が中央にいる黒くマントとフードを羽織っている不気味な機体に対して突撃を仕掛けるが左翼と右翼の部隊は自分達の指揮官を守ろうとせずに見ただけだった。さらに護衛にのこっているはずの18機の機体は下がりヒューリオンのみがその場に残った。

女性達が近接武装に切り替え切りかかると

「……………つまらないな」

命は、ただそうつぶやき自身の剣を2本抜き眼前に迫っていたナイフを両肩に装備した多関節武器「スコルピオンテール」を使い受け止め剣で貫いた。そして続いて振り下ろされたナイフもまたもう一本で受け止め切った。残りの2人は、二人の姿をみると震え始めたため

「まだ・・・続けますか？」

僕がそう聞くとすごい勢いで首を横に振り投降した。これでもってこのクーデターは鎮圧された。

side out 命

「さて・・・これでクーデターは終わりましたな。何か質問はあるかな？」

大統領は、記者達に質問があるかきくが誰も反応をおこそうとしない確かに今時分たちの目だ見たことが本当のことなのかかわからないだろう。だが、これが事実でありアメリカの力だ。

「では、後日また会見を開くのでそのときにでもまた質問されるように」

そう言い大統領は、退席した。その後は、いろいろと忙しくあの機体の説明などを求められたがこれをかたくなに拒否した。さらにIS委員会からもいろいろと交渉されたらしく僕は、あれから少ししてから大統領に呼び出された。

「失礼します」

「わざわざすまないね。ボルキユス將軍」

「いえ」

「急ですまないが君には今度から日本のIS学園に行ってもらおう」となった

「なぜ私が行くことになったのでしょうか？」

「ああ・・・IS委員会の連中がしつこくてなそれで君にアメリカの代表候補生としていってもらいたいのだが大丈夫か？」

「わかりました。では、いつごろ向かえばいいのでしょうか？」

「1週間後に向かってくれ。ま、君はもう大学を出たことになってるし休暇とも思っただけでゆっくりとしてくれたまえそれにこの間報道された君の兄である織村 一夏も通うようだ」

「そうですか。ま、それは普通でしょうね。では、失礼します」

「一応こちらからも何人が君の護衛を送り込む予定だ」

そう言うと僕は、部屋を後にした。

第5話

現在僕は、日本のIS学園に向かう途中の飛行機の中だ。少し前に護衛としてイオ大佐がIS学園の教師としてさきに向かった。そして、今はニケとレトの二人が今現在の護衛だ。ちなみにIS学園に対しては誰が向かうかはまったく教えていない（大統領が）何でもそのほうがいい宣伝になるらしいが何の宣伝なのだろう。

「それにしてもまさか將軍自らIS学園に行かれることになるとは予想外でした」

「そうですよ。將軍って確かもう大学卒業してましたよね？」

「ええ。私はすでに大学をでているよ。まあ、大統領からの指示だ。断るわけにもいかないな」

「ですが將軍IS学園で使用される機体は、ヒュケリオンなのですよね？さすがに学生相手には」

「大丈夫でしょう。仮にもISを学ぶための学園に通う生徒達だ私くらいどうにかできるだろう」

「さすがに將軍と比べるのは酷いかもですよ・・・」

ニケがそういいながら苦笑するが実際この2人は負けるにしてもそれなりに追い詰めることが出来るほどの腕は持っている。それに仮にもISの操縦者を育成する学校の生徒が僕に負けるのもおかしいだろうと思っっている。

『まもなく日本に到着いたします』

そのアナウンスが流れるといったん話すをやめた。そして飛行機が着陸するなり外の光景を見ると

「……日本のジャーナリストは仕事が速いですね。どこで知られたのでしょうか」

外に日本の報道関係の人たちが多く集まっていた。一応極秘のはずだったのだがどこからか漏れてしまったのかもしれない。そして、外にいる報道陣たちからの声は

『ボルキユス将軍がいられているとは本当なんですか!?!』

『先日のクーデターの映像での出来事はすべて本当なのでしょうか』

『ISコアの開発が可能とは本当なのですか!?!』

『将軍は、男性だということにたいしての答えを』

つといったような声が聞こえてくるがその報道陣達との間に軍の装甲車と迎えの車が来たので車で壁になった隙に迎えの車に乗り込み移動した。

ところ変わってIS学園の職員室

「本日アメリカから代表候補生がくることになっていてこのことは先日から知っていたであろうが何か質問等ある先生はおられますか」

そこで1年1組の副担任である山田 真耶が質問をした。

「その生徒はどのクラスにはいることになるのでしょうか？」

「その生徒は、1組・・・織村先生のクラスに入ることになっている」

そこで、担任である千冬が

「それはわかりましたが、その生徒の名前をまだ聞いていないのですが」

「・・・われわれにもまだ知らされていないためそれは答えられない」

実際アメリカ政府から送られてきた資料は、簡易的なものばかりで転校生の名前すら書いていなかった。アメリカ政府としてはもともとIS学園にいれる気はなかったためIS委員会が無理やり入れるように催促したためそこを強く言うことができないそれに先日の映像を見てしまっているため下手にアメリカに対して強く発言することすらできない。

「ふむ・・・わかりました」

少し場所を変えてIS学園にいる織村 一夏

一夏は、命の件があつてから今まで誇りであり自慢であつた姉の千冬の関係がギクシャクしてきていた。初めてこの学校に来た際姉がここで教師をしていることもしらなかった。そして、命のことに関してもし言い合いをした

『なぜ連絡をしなかつた！！！』

『連絡を入れても出なかつたくせにそれに、何で千冬姉がこんなところにいるんだよ！！』

『そ、それは』

『なんでもっと命の事を見てやらなかつたんだよ！！！！』

そこからはただ千冬は黙り自身の拳を握りしめながら下を見たままで無言で一夏の前から消えた。

そんな時にアメリカでのクーデターの報道を見て自分の弟は大丈夫なのかと失敗になった。それをすばやく鎮圧したアメリカのボルキユスと呼ばれている将軍が発した声を聞き自身の弟を思い出してしまったがあれに乗っているのが命のはずがないと思つた。

「ところで箒？今日って転校生がくるんだよね？」

「ああ。そつらしいな。アメリカの代表候補らしい」

「・・・あのオルコットを同じ代表候補か」

一夏は、イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットと来週の月曜日に決闘？をすることになっている。

「あんな性格のやつじゃなけりゃいいんだけどなあ」

「それより一夏午後からはISの実技の授業だぞさっさと更衣室に行け」

「ああ。わかったよ・・・」

「（一夏やはりまだ命のことを引きずっているのか・・・）」

篤は、一夏がどれだけ命を大事にしていたかを知っているためまだ気にしていると思うたのであろう。

「さて、着きましたね」

「はっ！...！」

「案内役の人は誰になっていましたかレト」

「大佐・・・イオ先生がすることになっています」

少しいいにくそうにしながら先生というレト確かにいつも大佐と呼んでいれればいいにくいのかもれない。そしてそれからすぐに

「申し訳ありません。将軍会議が少し長引いてしまい」

「気にしていませんよ。だから早速お願いします」

「はっ！ですが今は午後の授業でISの実技ですけどもそちらにいかれますか？」

「挨拶くらいは出来るでしょう。それでお願いします」

そういうとイオ先生？について行きちようど授業をしている所だったが僕は、そこで指導している教師を見て僕の視線が冷かなものになっていくのがわかった。

「織村先生。アメリカの代表候補生を連れてきた」

「ああ。イオ先生わざわざすまないな」

そういうと今まで起動の練習をしていた生徒達を集め紹介をしようとしたがいざこちらに目を向けると千冬は信じられないものでも見たかのような顔になり口をパクパクさせそんな状態の千冬を心配

した女性とはどうしたのかといった状態だが一夏は、その視線をたどりなぜこんな状態になってしまったのかを理解した。その視線の先にいた人物は、自分と姉とは違う白い長い髪そして、きれいな紅い瞳で右目に眼帯をつけてアメリカの軍服をきた子供をみた。イオは、その二人のことをお構いなしに自己紹介するように言う

「始めまして。IS学園の皆さん今日ここに転向してきました。アメリカの代表候補生のボルキユスといます。よろしくお願ひします」

正そういうと女性とたちは

『男の娘キタアアアア！！！！！！！』

『かわいい！！！！！！』

などといったことを好き勝手言っているが一夏が今の挨拶を聞くとうとうなっているのかわからなくなり聞いてしまった。

「み、命だよな？」

そういうと周りが急に静かになりそして

「ああ。お久しぶりですね。一夏お兄ちゃんそして、千冬お姉ちゃんも久しぶりですね」

冷やかな目のままそう言いやっとな冬が言葉を発するが

「な、なぜ命がアメリカの代表候補生なんだ？」

「それは、言う必要がありますか？」

「え？」

「僕は・・・私はただ代表候補生としてここにきたそれではだめですか？」

「だが、ボルキユスとは・・・アメリカの将軍でありコアの開発ができ」

「ええ。あれは全部私です。現在私は、アメリカで将軍をしています」

そういつと千冬は、力なく膝をついてしまった。

第6話

あの後の千冬は、授業を進められる状態ではなくなったため副担任の真耶が引き続き授業をするが生徒たちはあまり授業に集中せずボルキュスのことばかりを気にしだした。現在コアを開発できる人物は、失踪中の篠ノ之博士とボルキュスの2人のみだ。彼とお近づきになれば自分専用のISが手に入るかもしれないと甘い考えをしている。

その中一夏は、自身の弟が自分たちの前にまた現れたと思ったら自分が知っている弟ではなくなってしまうと感じ千冬とは違った意味で混乱している。そんな一夏を励ますかのように篤は、一夏に声をかけるがその彼女さえも昔の命のことを少なからず知っているが今目の前にいる者が同一人物とは同じだとは思えなかった。昔の彼であれば千冬や一夏に対してこんな冷たい目で見たりしないっと思った。

そんな集中もせずに行っている授業を見学していると

「え〜っとボルキュス君でいいのでしょうか？」

真耶が呼び方について質問してきた。ボルキュスが千冬と一夏の弟であるということは同じ織村ということになるのでそのために聞いたのであろう。

「ええ。それでかまいませんよ。それでどうかしましたか・・・」

「えっ。あっはい。授業を見てどうでしょうっか？」

「ふむ……そうですね」

少し考えたようなそぶりを見せると

「一言で言ってお遊びですね」

「っえ？」

その一言で授業をしていた生徒達全員の動きが止まりその視線をボルキユスに向けた。

「な、なぜそんなふうに言っのですか！？皆さん一生懸命にがんばっているんですよ！！」

真耶がボルキユスにたいしてそう言うが二人の間にイオが割って入った

「山田先生。貴女は、どう思っかの質問をしたのに対して將軍はただ感じたことを言っただだそれだけでなぜそんなに熱くなるんだ」

「で、ですがイオ先生」

真耶がイオに対して何かを言おうとするがそれを割って入るかのよう

「納得いきませんわ！！なぜ急に着たばかりのそんな子供に私たちの授業内容がお遊びなどといわれなくてはならないのですか！！」

「!!」

生徒達の中から金髪でブルーの瞳をした女性とが抗議してきた。

「それに、先ほどの会話からさっするに貴方織村先生の弟だからと言って少し調子に乗りすぎではありませんか？それにこのIS学園に貴方のような子供がくることこそお遊びにきたのではなくて？」

その女性とがそう言つと近くにいた。レトとニケが前に出て

「……將軍この女解体してもいいですよね？」

ニケがそう言い殺気を出した目でその生徒を睨む

「ニケ……それは私が撃つてからにしないで」

レトは殺気は出してはいないがさっきのボルキユスのような目をした。

「やめろ!!ニケ、レトここは一応は学園なんだぞ！」

「ですが大佐!!!!」

「いいから黙っておけ!!」

イオが二人を止めるがそのイオも若干怒りをだしている。

「ほお……では、貴女は私のことをそこまで言つのであれば自信があるのでしょうか」

ボルキユスがそう言つたとその女性とは当然と言つふうな態度で

「もちろんですわ！！私セシリア・オルコットは、イギリスの代表候補生にして入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「（確か一夏お兄ちゃんも倒しているはずですがまあいいでしょう）」

本来ボルキユスも編入試験を受けなければならなかったがIS学園の教師達がそれを拒否したと言う理由で試験は行われてはいなかった。どんな人物がくるのかも知らされていなかったがアメリカのISはバリア無力化攻撃が全機体可能であるという情報だけは知っていたのでそれに情報規制等のせいで一般人にはあのクーデターの時の映像で殺す所だけは報道されてはいないが教師たちはそのことを知っていた。

「ほお・・・それはそれは、私はエリートと言われている無能をそれなりに見ましたが貴女もその類なんでしょうな」

「あ、あ、あ、貴方！私を侮辱するつもりですか！！！」

「ああ。私は、思ったことをただ言っただけだが気に障ったのなら謝ろうか？」

「つく！！！！いいでしょうそこまで言うのでしたら来週そこにいる織村さんと・・・貴方のお兄さんと決闘することになっていますし貴方も戦つてさしあげて私が本当のエリートということを証明して

さしあげましょう……！」

セシリアがそう宣言すると一夏と箒を除く生徒達は盛り上がったように歓喜の声をあげているが一夏と箒は複雑そうな表情をして真耶はとても顔色が悪くなった。

「ほお……いいでしょう受けますが。私はいくつハンデをつけられればいいのかな？」

そう言うとセシリアと他の女生徒達は笑い出した。

「それ本気でいつてるのw」

「さすが織村君の弟だねおんなじこと言ってるよw」

「むしろ私がハンデをつけますわ」

そんな中ボルキウスに対して話しかける女性とがいた。

「ねえ。ボルキウス君今からでも遅くないからハンデつけてもらえばいいよ」

「そうそう、男が女に勝てるわけないんだし」

「ふむでは、私はハンデを何もつけずに戦っていいということですよ
るしいかな？」

「ええそうですわね」

そのやり取りを聞いていた真耶がボルキユスに対して

「あ、あのボルキユス君！ハンデをつけてくれませんか！？」

その対応になぜと言った表情をしたセシリアが

「山田先生そんなものは要りませんわ。それに私がこのような子供にまけるわけ 아닙니다。まったくアメリカはなぜこんな子供を代表候補にしたのでしょうかとても理解になやみますわ」

「っだそうですので山田先生私は、ハンデはいらないらしい。では、今日はこれで失礼させていただきます」

そう言うアリーナから出て行きその後をニケとレトがついていったがその後を追いなんとか考え直してもらおうと追いかけてようとした真耶をイオが止めた。

「イオ先生なぜ止めるのですか！」

「オルコット自身必要ないといったんだ。ならば將軍がハンデを負うことはないでしょう」

「ですが、貴女ならよく知っているはずですがもしもオルコットさんと戦えばほぼ確実にオルコットさんが・・・」

「山田先生そこからは知られては不味いはずですが・・・それと山田先生」

「・・・なんでしょうか」

「オルコットは少し我が祖国を・・・ボルキユス將軍を馬鹿にしすぎた。あの場では私はあの二人を止めるだけで精一杯だが私もこれ以上は我慢はできないぞ」

その一言で真耶は、自分が先ほどのセシリアの暴言に対して何も対処していなかったのを忘れていた。現在このイオは先生としてここに着たが現役のアメリカ軍のボルキユス大隊所属の大佐であるしボルキユスも將軍という立場の人間である場であることを持ってこれれこのIS学園に干渉することさえできる現在のアメリカは、条約を無理に守る必要性がまったくないため攻めてこないという可能性はないわけではない。

「なに、將軍もむやみに殺したりはしなはずだ・・・たぶんだが」

そう言われとても不安になってしまった真耶だが最後の一言は夏に少し聞こえていた。

「（殺す？なぜ命がオルコットの事を殺すんだ？ISに乗っていれば殺される事はないんじゃないのか！？・・・命お前は どうして変わっちゃまったんだ。俺がもっとお前の事をかまってるやっつていれればこんな風にかわつたりしなかったのか？）」

第7話

現在アメリカは、中東の小国であるクリシユナ王国と交渉が行われていた。クリシユナは、小国ではあるが水産業が盛んだそして何よりレアメタルが豊富に採掘されているためとても豊かな国だ。その採掘されるレアメタルの中にボルキュスが造るISのコアに必要な素材があったためアメリカのロキス書記長がクリシユナとそのレアメタルの採掘権についての交渉をしている。

当初は、この交渉に渋っていたクリシユナ外交官だがその外交官を下がらせクリシユナの天才技術士といわれているシギユン・エルステルに代わった。彼女からの条件としては、アメリカの技術提供であった。これはもちろんコアのことだが現在このコアを使ったISは、アメリカ軍全軍に配備されているわけではないためかなりづらい。

現在配備されているのは、開発者であるボルキュス將軍の大隊に120機でさらにワシントンにテロ対策などのため300機配備されて後は近くの基地に2〜5機配備される程度のためそんな中でコアの提供はきついがクリシユナは、もしもこれが受け入れられない場合は採掘権を渡さないだけでなく輸出もしないと言ってきた。そのため仕方なくコアを提供することになった。

現在クリシユナ王国にあるISは、全部で15機で第二世代ファブニルだけとなってはいるがロキス書記長は、これ以外にも何か隠していると確信を持っていた。

「つく！！あの小娘にしてやられた！！！」

「書記長落ち着いてください」

「……ああすまない。少し感情的になりすぎた」

「コアを提供することになったのは痛手ですがなんにしるこれで探掘権を得ることができたわけですし今回はこれでよかったということだ」

「……嫌、今回手に入った鉱山はもともと我等が欲していたところではなく第三希望の場所だ。はっきり言って今回の交渉はこちらの負けだ」

そう言つとロキスは、苦虫をつぶしたような顔になった。

「何にしてもとりあえずは今回は手にいることができただけでもよかったと思うしかないようですね」

「ああ。そう言うことにしておくことにおこう……それでバデス主席將軍補佐官新造艦のほうはいつごろ完成する予定なんだ」

「順調に行けば夏までには完成するかと……」

「それにしてもボルキュス將軍には驚かせるばかりだな新造艦の設計図に新型戦車にパワードスーツといった物のを日本にいくまでに残しておいてくれるとは、こちらとしてもありがたいが」

「確かに將軍は、まだ若いですがしつかりとしておられますしそのおかげで我等はまたこうして戦場に立つことができました」

そう言うと二人は、笑みを浮かべ報告書に目を移した。そこに書いてあった物は”アーセナルギア”

”アウターハイブ”と命名されている巨大戦艦の報告書であった。

私達は、アメリカとレアメタルの採掘権についての交渉をしにきたけど最初の外交官ではアメリカのロキス書記長に言いくめられそうになったために私が代わった。そして、私はコアの提供を採掘権の譲渡の条件にした。さすがのロキス書記長もまだ全軍に配備が終わっていないコアの提供は渋ったが輸出停止を言うと提供してもらえることになった。

「シギユン様。お疲れ様でした今回の交渉はうまくいきましたね」

「ええ。そうね今回の交渉で私達はだいぶ利益ができましたが向こうはあまり利益がでなかつたみたいね」

私は、護衛として一緒に来ていたナルヴィ・ストライズ上等重騎士にそう言った。

「……ですが今回私達は、利益を取りすぎましただから」

「何か事件があればアメリカは、こちらにそれを理由に攻めてくると？」

「ええ。間違いなく攻めてくるわ」

ナルヴィは、そんなことないと言うが今回の交渉相手であるあのロキス書記長なら絶対攻めてくるであろうと思った。それにもしも攻めてくるのでは、アメリカには最強のカード持っているこの間のクーデターをすぐに鎮圧したあのボルキウス將軍がいる。彼は、軍や政府にたいしてもかなりの発言力を持っているとも聞く。だがその姿は一度も見たことはない。

「それよりシギユン様先ほど報告がありましたアメリカ軍のボルキウス將軍が日本のIS学園に編入したという報告が」

その報告を私は聞くと彼に接触して何とかロキス書記長をとめてもらえないかと考えた。まずそのためにも

「……ナルヴィすぐにクリシュナに戻って日本のIS学園に私た

ちも編入する準備をするわよ」

「へ？何言ってるんですかシギユン様！」

「今のうちに何とかボルキュス将軍に接触してロキス書記長を説得してもらおう……」

「……本気ですか」

「ええ。アメリカは、今の調子でなら早くて夏には戦力が整うわ最低でも秋には完璧に……だから時間がないの」

「わかりました」

そう言うと二人は自国に戻るために空港に移動した。

第8話（改）

現在ボルキュスは、第三アリーナのAピットに来ているそこには他に一夏と箒、イオ、ニケ、レトがいる。でも、一夏達とボルキュス達は話をしないそんなボルキュスの事をちらちらと一夏は見るがそれを完璧に無視してセシリアの専用機である”ブルー・ティアーズ”についての情報を見ているがそれは学園側に渡された情報に過ぎないためあまり信用はしないがとりあえずはピット兵器使うという事だけを覚え主力武器であろう遠距離射撃用武装のスターライトmk?の威力などを参考にはしておいた。

そんな若干気まずい雰囲気の中そこへ山田先生が息を切らしながら走ってきた。

「お、織斑君織斑君織斑君っ」

その声が聞こえてきたほうを一夏と箒は向きボルキュス達は目だけそちらに向けた。

「山田先生、大丈夫ですか？。一度、深呼吸してください」

一夏がそういつと山田先生は、大きく深呼吸を一度すると落ち着いたのでか続きを話し始めた。

「お、織斑君来ましたよ！織斑君の専用IS！早く来てください」

「いくぞ、一夏ー！！」

どうやら、ようやく来たみたいですね。一夏お兄ちゃんが箒さん

と山田先生に引つ張られてつれられていく。その間もこちらをちらちらと見てくるがいいいたい事があれば言えがいいのにと思ったがやはりどうでもいいと思ってしまった。そこへ千冬お姉ちゃんが来て

「・・・どちらが先に出るんだ？織村かみ・・・ボルキユスか」

命と言いそうになった時イオ先生が睨んだことに気づいたのかボルキユスと言い直した。

「では、私から行かせてもらいます」

僕がそう言うのと一夏お兄ちゃんと千冬お姉ちゃんが何か言おうとしたがその前にニケとレトが割って入り

「将軍がんばってください！・・・！」

「私達の国を侮辱した。あの女を倒してください！・・・！」

レトとニケに声援をもらおうと

「わかった。できるだけがんばろう・・・」

そう言うのとヒュケリオンを展開してゲートから出た。ゲートから出るや否や観客席は女生徒たちで埋まっている。そして、目の前にはオルコットさんがいた。

「あら？逃げずによく来ましたわね」

セシリアは、ボルキウスを見るなりそう言うがとうの本人はどうでもいいかのように無視をするが

「では、最後のチャンスをおげますわ」

セシリアは、腰に当てた手でボルキウスを人差し指を突き出した状態で向けて左手に持った銃は余裕なのかまだ砲口が下がったままだ。

「ほお・・・チャンスとは何かな？」

「わたくしが貴方のような子供に勝つては一方的な勝利を得るということは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで私に対して言った暴言を謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

そう言って目を笑みに細めるが

警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。
セーフティのロック解除を確認。

「ほお。だがそれは、チャンスとは言わないのではないか？それに私はあの時何か私は何か変な事でも言ったかな？」

「そう？残念ですわ。それなら

」

「そして、このアリーナにいる全員に問いたい貴女達は男性が女性には勝てないと言ったな」

そう言つとあちこちから「何を当たり前のことを」つと言つた風な声が聞こえてきた。

「だがそれは、女性にしかISが使えなかったからだ。・・・だが私は貴女達しか使えないはずのISを使っているこれでも男性は女性に勝てないと思うかね？」

そう言つとアリーナはざわめきだした。確かにそのとおりだと言ふ声も聞こえてくる現在自分たち女性にしか使えないとされてきたISだが目の前にいるボルキュスはすでに男でも扱えるISを造りそして織村一夏はそのISを使つてもいないにもかかわらずISを使用できている。この事からすでに女性が優遇されることはないとして対等になった。後は、どちらが強いかただそれだけの話だそうなればほぼ男性が勝つことになる軍であればISのせいでもやめる事になった者達が戻りまた空を飛ぶそして女性は、必然的にどんどん追い詰められる事になるだろう。ボルキュスの今の言葉で完璧に現実をみてしまった女生徒達だ。

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「喰らいなさい！！」

そしてセシリアは、キュインツ！と独特な音とビット4機が展開して共に撃たれたビームがボルキュスの元へ駆けるそして、盛大に土煙がたった。

「命！？セシリアの奴いくらなんでもやりすぎだ！！！」

一夏は、モニターに写る光景を見て叫んだ。

「オルコットめ子供相手にやりすぎではないか！！！」

篤もさすがにやりすぎだと思い叫ぶがそんな二人とは裏腹に千冬は冷静に

「二人とも静かにしろ」

そう言うがその手は、コブシを握って耐えているかのようだった。

「千冬姉なんでそんなに冷静でいられるんだよ！！また、また命を見捨てるのか！？」

一夏がそう言うのと千冬は、歯を食いしばって耐えた。興奮状態の一夏に対しイオが話しかけた。

「織村……どちらも同じだったな。一夏君少し落ち着け」
「だけど、イオ先生！！！」
「将軍がこの程度で負けるわけがないだろう」

そう言うのと一夏と篤は、少し冷静になったのかイオの声に耳を貸し

「ほら、モニターを見てみなさい」

大量の土煙の中でゆっくりと動く影が見えた。

「な、何ぜ。無傷ですよ!？」

ボルキユスのヒュケリオンは、まったくの無傷の状態で現れた。

「何か今したのかね？」

セシリアを挑発するような話方をする。それにたいしてセシリアは頭にきたのか。

「っ~~~~!!? 踊りなさい!! わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

そう叫んで4機のビットをもう一度展開しようとするが

「……遅すぎるのだよ」

セシリアのビットが展開されると同時にまだ少し舞っていた砂煙の中から赤いビームが放たれた。

「な、何なんですの!？」

「油断しすぎだよ。あれだけの土煙をあげたのだその間に何か仕掛けられていてもおかしいとは思わなかったのか？」

完全に煙が晴れるとそこにはまるで牙のような形をしたセシリアのビットとはまた違った形のビットが4機展開していた。

「な、なんですか！？ビット兵器を使っているのイギリスだけのはずですわー！」

「いつからビット兵器は、イギリスだけのものになったのですか。アメリカでもすでに開発されていますよ」

そう言つとボルキユスはビットをマントの中にしまった。

「……何のつもりですか」

「いや、この兵器はなかなかつまらないからね。これからは使わないで戦ってあげよう」

「つゝゝゝ！？後悔してもしりませんわよ！……！」

そう言つと主力武器である銃を連射してくるがそれをボルキユスは最低限の動きで避けセシリアの近くまで進んで行く。そんなボルキユスの対応にセシリアは徐々にあせりだしてきた。

「（なぜ当たりませんか！）」

先ほどから何発も撃っているがそれは当たるところかかすることすらせずに避けられほとんど近づかれる。それは次第にあせりから

恐怖に変わっていく。

「い、嫌こないで。こっちにこないで!!!!!!」

セシリアは、虎の子の2機である『弾道型』を撃つがそれをヒュケリオンのスコルピオンテールで破壊されスターライトでもう一度撃とうとして構えるが構えた瞬間に目前まで迫っていたヒュケリーオンによって剣で破壊された。

セシリアは、最後の武器である接近戦用のショートブレードのインターセプターを出すがセシリアは目の前にいるボルキユスが死神にしか見えなくなっていた。すでに戦闘意思はないのは明らかであるがまだ彼女は武器を落としていないそしてこれは、模擬戦ではなく”決闘”だ。

「た、たす・助けてください・・・助けてください」

セシリアはただボルキユスにそう言うが

「だがこれは決闘なのだろう？決闘とは本来どちらかが力尽きるまで続けるものだ・・・そうだろう？イギリスの代表候補生のセシリア・オルコット」

その顔は、恐怖と絶望に染まっていく。

ボルキユスがそう言うところへ2人の乱入者が現れた。

「はあああああ！！！！」

それは、日本の第二世代機打鉄に乗った千冬とさつき届いたばかりの白式に乗った一夏であった。二人はヒュケーリオンに切りかかるが千冬の一撃は避け一夏の攻撃は、スコルピオンテールで受け止めた。

「何のおつもりかな？織村先生……」

「……オルコットはすでに戦闘続行は不可能だ。これ以上の戦闘はみめるわけにいかない」

「命どうしちまったんだ！？ここまでする必要なんてないだろう！？」

千冬は、ボルキュスに……命に剣を向けることをためらっている。一夏はなぜここまでするのか信じられないといった感じだが

「それは、簡単なことですよ。オルコットさんは私に模擬戦ではなく”決闘”を申し込んできた。ただそれだけですよ……それにまだオルコットさんは武器を持っているなら戦闘続行の意思があるということでしょう。違いますか？」

「だが、それでもこれ以上の戦闘は認められない！」

「……」

なぜお姉ちゃんは、僕に剣を向けるのかわからない。

「セシリアは、もう戦えないけど。俺が相手をしてやるよ命!!!」

「なっ!!!一夏止まれ!!!」

何を思ったのか一夏がヒュケリオンに向かって突っ込んできたがそれをボルキユスは綺麗に避けそして、スルピオンテールをうまく使い一夏を傷つけないようにアゴをかすめた。そして、そのせいで一夏は軽い脳震盪を起こして気を失った。

「……………命なぜお前はそうなったんだ？昔のお前はどうしたんだ？」

千冬が、急に話しかけてきた。

「……………」

「私のせいでお前は変わってしまったのか？それなら謝るだから昔の命に戻ってくれ……………」

「……………何をいまさら言うのですか？僕の事を捨てておいて？」

ボルキユスがそう言うと千冬は、驚いた様な顔をして

「ち、違う私は、お前を捨ててなどいない!!!」

「言葉ではどうとでも言えます。私が・・・僕が右目を無くしたときも一度も来てくれなかったくせにいまさら何を言うんだ!!!」

「僕がどんなにがんばったとしてもいつも一夏お兄ちゃんしか見て僕の事は見てくれもしなかったくせに!!!!!!今更何のつもりだ!!!!!!!」

僕はそう叫ぶと両肩のスコルピオンテールで千冬お姉ちゃんを攻撃した。それを避けようとする千冬だがその避ける先を読みそこへショットガンを撃ちこんだ。それは、ほぼ全部当たりシールドにより弾こそは当たってはいるが衝撃はすべて通っている。千冬は倒れるような形になったがそれを剣を地面に突き刺す形で支えた。

そして

「確かにそうだった。お前の事をちゃんと見てやれなかった。今更謝っても遅いという事はわかってるが・・・すまない。許してくれとは言わないがせめて一夏とだけでも昔みたいに接してくれないか私のことを怨んでもいいだから。頼む・・・」

そう言うと一夏同様に気を失ってしまった。自分はなぜこんな事をしたのだろう。本当は、こんな事をしたかったわけじゃない。ただ自身の姉のためにがんばっていただけのはずがなぜこうなったのだろう。そんな考えをしているとイオと山田先生がやってくる。

「・・・ボルキユス將軍。今回はこれくらいでやめておかれたほうがよろしいかとこれ以上続けらるるのはさすがに」

「ああ。さすがに今回はやりすましたね・・・」

僕は、そう言うとき千冬お姉ちゃんの言った事を思い出した。なぜ今更になって謝るのだろうか僕は、謝ってほしかったわけではない。なのになのに・・・

「あ、すみません。イオ先生オルコットさん達を医務室に運ぶのを手伝ってもらえますか？」

「山田先生。オルコットさんは私が運びましょう。一応は私の責任ですから」

「えつ。あ、じゃあお願いしますね。ボルキユス君」

ボルキユスは、いつの間に気絶していたのかわからないセシリアをいわゆるお姫様抱っこという形で運んだ。その後は、今までは学園の外にあるホテルから登校していたが部屋の準備ができたため学生寮に移れることになったという山田先生からの連絡を受けて荷物はずでに運ばれていたのもそのまま寮に戻った。

「・・・ふう」

ボルキユスは、窓の外を眺めながらつぶやきそして先日行われたアメリカでのクリシユナでのレアメタル採掘権についての交渉の報告書を読んだ。結果だとこちらが完璧に負けたという感じだと思

そして、ロキス書記長は絶対にクリシユナに対して近い未来に軍事行動を起こすであろうと予測をしさらにレトのおかげでデータがそろってきていたエルテームスの改良案を考えていた。

確かロキス書記長の妹のゼスという人から何機か回してもらえな
いかという嘆願書があった。改良を終えたエルテームスを彼女に預
けてみるのもいいかもしれないと考えながらその日は就寝についた。

第8話(改)(後書き)

一度和解させようかと思いましたがしばらくは、元のままを進めていこうと思いい編集をしておきました。

第9話

あの後一夏と千冬はというと真耶とイオによって医務室まで運ばれた。その後は、時期に目が覚めると言うことだったため二人はその部屋を退室してから数時間が経ち医務室にある窓からは月明かりが照らしたされるころにやっと千冬は目を覚まし自分が今医務室のベットの上にいることを理解した。今日の出来事を思い返していくそして今日の戦闘で命が言った言葉を思い出しゆっくり思い出していく

『……何をいまさら言うのですか？僕の事を捨てておいて？』

『言葉ではどうとでも言えます。私が……僕が右目を無くしたときも一度も来てくれなかったくせにいまさら何を言うんだ……！……！』

『僕がどんなにがんばったとしてもいつも一夏お兄ちゃんしか見て僕の事は見てくれもしなかったくせに……！今更何のつもりだ……！……！』

「（あの時私は、何も言い返せなかった。いや、言い返せるわけもなかったあの子にとってそばにいてほしいときに私は何もしてやることができなかった。……それどころか私は、オルコットを助けるためと言え命に刀で切りかかってしまった。）」

再度今までの事と今日の自分がした行動を後悔したがそれはもうすでに気づくのが遅すぎた。だが私は

「……一夏起きているか？」

隣で寝ているはずの一夏に声をかけた。

「……起きてるよ。千冬姉」

「私は、どこで間違ってしまったんだろうな……」

私はただ力なくもう一人の弟に聞く。

「いや。千冬姉だけのせいじゃない……俺も間違ってたんだ」

「そうか……。私は命が賢い子だからといってそれに甘え命のことをまったく見ていなかった。心のどこかで命なら大丈夫だと思っってしまったんだろうな」

「俺もそう思ってた。いつも命は、いろんなことをがんばって結果を残してた……俺なんかよりずっとがんばってたのに俺はそれが無理をしたことだって気づいてやれなかった」

一夏がそう言いさらに言葉を続けた。

「あのさ千冬姉」

「・・・なんだ一夏」

「俺さ。命がアメリカに行くとき見送りに行っただけどさその時に”いつでも帰って来い”って言ったんだけどさ命はただ俺にただ”バイバイ”ってだけ言われたんだ。その時初めて弾の前でみっともなく大泣きしちまったんだ・・・」

「すまなかつたな一夏・・・命にも言ったが今更言っても遅い。私のことを怨んでくれてもいい。私は、今までちゃんとしていたつもりで実際はただお前達に辛い思いをさせていただけだった」

一夏は、千冬がそういうと自身にかかっていた毛布を深くかぶり

「・・・千冬姉がどれだけ俺たちの事を育てるためにがんばってたのかは知ってるつもりだから。俺は怨みも憎んだりもしな。だけどさあ、せめてあの時は命のそばにいてやってほしかった」

病室の中にかすかにすすり泣く声があったが千冬は、それを聞こえていないフリをして

「今まで本当にすまなかつた」

そう言い。目を閉じるとその瞳から涙が頬を伝っていった。

場所が変わりそこはIS学園の寮の一室の浴室で。サアアアアア・・・

シャワーノズルからの熱めのお湯が噴出し水滴は肌に当たって弾け、またボディラインをなぞるように流れていく。白人にしては珍しく均整の取れた体とそこから生まれる流線美はちよつとしたセシリアの自慢だ。しゅつと伸びた脚は艶かしくもスタイリッシュでそこいらのアイドルには引けをとらないどこか勝っているくらいである。

胸は同じ年の白人女子に比べると幾分か慎ましやかではあるが、それが全身のシルエットラインを整えている要因でもあるので本人としては複雑な心境だという。しかしそれも白人女子と限定すればの話であつて、日本人女子と比較すれば充分どころか大きいくらいだ。

その胸にシャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。あの後わたくしが目を覚めると医務室のベットで誰がここまで運んできてくれたのかと山田先生に聞くとあのボルキユスさんだと言うこと

(今日の試合、いえあれを試合と言えるものではありませんでしたわね)

今日、戦ったボルキユスの事を考えていた。彼の戦い方はまるで小さな子供が遊ぶような感じがした。彼は、いつでも私を倒す事ができるはずだったのにもつと遊びたいがためにビット兵器をしまつて戦った。それは、少しでも長い時間そうしていたかったかのよう

に。
わたくしは、無様と言つていい様な命乞いまでもしたがその時の

彼の声は私の事を恐怖で染めようとしていた同時にどこか悲しさのような雰囲気があった気がしたような気がした。それは、たまたまそう思ってしまっただけなのかもしれない。気を失う時彼は、織村先生に捨てられたと言っていたような気がした。それが事実なのかは私にわかりませんがそれが本当ならなぜ織村先生と同じく”織村”を名乗らずボルキユスと名乗っているのかも納得いく。

ボルキユス・・・アメリカの將軍であり男性でも使えるISSコアを造った人ISSに乗っている女性の一部には恐怖の象徴とされている人物だったがいざ見てみたらそれはまだ幼い少年だった。右目には眼帯をしていたがなぜしているかは分からない。でも、セシリアは不意に自身の父親の事を思い出した。父は、母の顔色ばかりをうかがう人だった・・・

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていたのだろう。幼少の頃からそんな父親を見て、セシリアは『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにはいられなかった。

私は出会ってしまった。ISSについての私達女性の間違った考えを指摘しその時のボルキユスはどこまでもまっすぐな人だと思ってしまった。

「織村 命・・・いえ、ボルキユス」

その名前を口にしてみると、不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。どうしようもなくドキドキとして、セシリアはそつと自分の唇を撫でてみる。水滴に塗れた形のいい唇は、触れることを望んでいたかのように不思議な興奮を生み

「・・・・・・・・・・」

なんだろう、この気持ちは。

その正体を。その向こう側にあるものをこれが彼の恐怖から生まれ
たものなのかそれとも

知りたい。彼の。ボルキユスのあのどこまでもまっ
すぐな様でなぜあそこまで悲しそうな瞳をするか

「・・・・・・・・・・」

そこには、ボルキユスによって刻まれた恐怖よりも彼のことも
っと知ってみたいと感情が大きく膨れ上がり彼の恐怖を徐々に無く
なっていた・・・・・・・・

第9話（後書き）

感想しだいでは書き直します

第10話

翌日、朝のSHR。あり得ないことが起きていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

山田先生は嬉々として喋っているがクラスの女子は盛り上がることはなかった。

「あ、あれ?皆さんどうしたんですか?」

昨日までと比べ明らかに元気がない女生徒達に真耶はとても不思議に思ったが、その原因については彼女自身もわかっているためにあまり触れなかった。

「先生、質問です」

クラスの女子の一人が挙手をした。

「えっとどうしましたか?」

「え〜っとこんな事言うのも何なんですけどボルキュス君が代表じゃないんですか?」

やはりボルキュスのことだがそれもそうだろう現在最強の称号をもっている”ブリュンヒルデ”である千冬を倒しさらに専用機2機を連続で倒した人物だ。そして、自分たちに今この世界の現実を見せた千冬が負けた事はすでに学園中に知れわたってしまいあのボル

キユスが言った言葉もすでに知れわたっている。そんな人物ではなく言い方を悪く言っと出てきて速攻で負けてしまった一夏では、頼りなかったのである。

「え、え〜っとボルキユス君の事なのですが彼は元々クラス代表を賭けての戦いだった事も知らないようでしたし。それに彼自身からも『私は、辞退させてもらいます』と言われていきますので」

そう言つと女生徒は、納得したのか椅子に座つた。そして、一夏もなぜ自分なのかについての質問のために挙手した。

「はい、織村くん」

「俺は、昨日負けたんですけどといよりはそもそも試合をしていないんですけど」

「えっとそれについては」

「私も辞退したからですわ……」

セシリアも昨日の戦闘で思う事があつたのか以前と比べとても大人しかつたつと一夏は思った。そしてそんな少し重い空気の中真耶が思い出したかのように

「あ、後織村君「なんですか？」ボルキユス君から一夏君に辞退した理由なんですけど……弱すぎます。せめて経験をつむために代表になつてください」だ、そうです」

その事をいい終わると一夏は、ボルキユスに弱すぎると言われたことで机に倒れこむような形になっていた。

「あ、でも確かセシリアのISランクがAって言ってたしやっぱりセシリアにやってもらおうよ」

女子の一人がそう言うが昨日のことを思い出しランクがたとえAでもあれだったので意味がないのではと思うものも何人かいた。そこへ教室の扉があき出席簿を持った千冬がちょうどよく入ってくる

「お前たちのランクなどゴミでしかない。私からしたらどれも平等にひよつこだ。まだ殻も破れていない段階でだれがマシだの優劣をつけようとするな」

そう言うのと今まで静観していた一人の生徒……ニケが千冬に對して言葉をはった。

「へえ〜。なら織村先生は、將軍は別としてそれは私にも言ってるんですか……」

「……ああ。その通りだ。何か問題でもあるのか」

「いいえ〜ただ織村先生って強いのかなって思っただけです」

ニケが千冬にたいし少し挑発するかのような声で言うがその目は本気だった。それにたいし千冬は

「ニケつまり私の実力を見たいということでもいいのか……」

「はい。そうです」

そう言つと教室がざわめきだした。いくら千冬が昨日ボルキウスに負けたからと言つてこれははつきり言つて普通なら無謀なことだ。

「・・・わかった。次の授業の時に相手をしてやるつ。それよりも肝心なボルキウスはどうした？」

そう言われ今まで二ケを抜かす全員が気になっていた事を千冬が聞くと二ケが少し不機嫌になりながら

「將軍だつたら近くのアメリカ軍基地に行つてます・・・」

「（米軍基地？なぜだ？）なぜ授業にでずに基地に行つてるんだ特にそう行つた連絡は聞かされていないが」

それに対して真耶がおずおずと手をあげ

「あ、あのすみません織村先生。今朝早くにイオ先生から今日はアメリカ軍のセグント將軍から基地に出頭するように言われたのでボルキウス君はそちらに行く事になったと言つ事を言い忘れてました。」

そこであきれるかのように眉間に手を当てながら

「二ケ。なぜ出頭したのかの理由を詳しくは言えるか？」

一度二ケは考えるがまあいいかと思つたのか

「基地にラドウンが配備されたからその訓練のために出頭するらしいです」

そういい終わると周りの生徒達はざわめきだした。現在量産されているISの中ではもっとも性能がいい量産機とされているISのため使ってみたいと思う生徒達だった。

「あ、あのニケさん少し聞いてもいいですか？「なんですか？」そのラドウンってこのIS学園には配備してもらえないでしょうか？」

そう言うなり周りの生徒達は、目を輝かせるが

「無理ですよ」

ニケはただ即答してそう答えた。その答えで明らかに残念がる生徒達。

「そこをどうにかありませんか？今後の皆さんの授業のためにも・・・」

真耶は、教師として性能がいいものを使わせてあげたいと思うのだが普通であればそのような交渉はニケに対して行うものではなく上の者に掛け合うべき事である。

「山田先生・・・そもそもそう言う交渉とかは私じゃなくてイオト・先生が将軍に言ってくださいよ私の階級はまだ少佐なんですからそこまで発言力ないです」

そう言われ真耶は、うなだれたが真耶はイオとボルキュスのこと

が苦手だったりした。イオは、雰囲気が怖いと感じてしまいボルキユスに関しては単純に恐怖だ。真耶のことを見ているうちにニケがなにやら思いついたのか

「あ、じゃあもしも私が織斑先生に負けたらこの事將軍に掛け合ってみますよ」

そう言い真耶の表情が明るくなるが

「それでももしもお前が勝った場合はどうするつもりなんだ？」

そこへ一夏がなんとなく聞いてみた。ニケはとても残酷な表情を浮かべながら

「私が勝ったら・・・將軍との縁を切ってもらえませんか？ついでに將軍をミコトって呼ばないでもらえますか」

「なっ!?!」

それに対して一夏と千冬が驚きの表情をした。

「あんまり將軍の事当然のようにミコトとか呼ばないでくれます？いつもいつも聞いてはらたつんですよね。自分で捨てたくせに有名になつたら急に話かけるとか・・・ホントムカツクんですよね」

それ対しての返答を聞くためか回りは静かになった。

「・・・わかった。それを受けよう」

「!?!?。千冬姉!?!」

「いいんだ一夏。……私が勝つたら一夏が命と呼ぶ事は認めてもらおう」

その返答として

「はいはい。わかりましたよ……」

ただ適当に返答した。

そのころボルキユスはと言うと。

『はあ！！！！！！！』

「……焦って攻めてくるな。つねに冷静に行動しろそうしなければ無様に死ぬだけだ」

そう言いながらボルキユスもラドゥンを使い格闘戦訓練をしておりその反対側ではレトによる射撃訓練が行われていた。彼らは教室でどんな事が行われているかはまったく知るよしもなかった。

ちなみにイオはというと

「・・・書類の数が多すぎるな」

本来の軍人としての書類とIS学園の書類の整理をしていた。もしもイオが教室にいれば何とかなっただのかもしれないが今は書類の山を片付けていた。

第10話（後書き）

近いうちにこれは書き直そうか感想を見てから決めたいと思います。

機体説明

第二世代ラドウン

現在アメリカ力で量産されているISでこの期待の最大の特徴としてはやはり従来の量産型ISにくらべ圧倒的な機動力と男性でも操縦可能という利点だ。

そして、現在配備されている機体ではボルキユス大隊に所属している120機にはマントとビームガンが装備されているがそれ以外の300機近くの機体にはM4と言った武装で統一されている。(ちなみにサイズだが従来のISより一回り大きくなっている。)

第二世代ギラトス

二ケの専用機の重量型である。特徴としては前腕から手首を包み込むように一体化した、カマキリを思わせる巨大なパーツが特徴。それを万力の様に使って両腕で相手を挟み込み、そのまま押し潰す戦い方をする。パーツに内蔵されたマシンガンによる射撃や、パーツに付いている鋸状の刃を使った格闘もできる。普通の手首も付いているが、位置的にパーツに包まれているため物を吊り下げる時くらいしか役立たない。

準第三世代トロイア

イオ専用のIS。

この機体はイオ自身でエルテームス等の廃棄パーツを使用してカスタムしている。高級パーツを大量に使用した希少価値の高いISで

ある。本来は、ラドゥンと同じ第二世代だがカスタマイズのせいでその性能はそれを圧倒してしまい準第三世代となっている。武装はボルキユスが直々に作り上げた十字剣・クロスサイフォス最硬度を誇るほどの一品である。

第三世代ベルセボネ

バデス専用の重量型IS。

武装としては、ランスガンを主力武器とした機体でありそれ以外の武装も多数内臓している。

第三世代ドラギア

アイレス専用の重量型IS。

武装はハルバードを使用しその柄の部分にはランスガン同様に銃が内臓されている。

第三世代ヒュケリオン

アメリカ軍ボルキユス將軍専用機の重量型ISでありラドゥンより若干大きい。

武装に関しては右腕に短剣、左腕・両膝側面に内蔵射撃武器を1つずつ装備する他、両肩に多関節武器「スコルピオンテール」を装備する。これに加え、通常の射撃武器を多数に剣とシールドまで携帯しているという、多数の武器で身を固めた化物機体。

第三世代エルテミス

レトの専用機でありテスト機体である。カラーリングはニケと同じで薄い水色にしている。

機体性能は、現在アメリカで開発された期待の中ではトップクラスの性能であるがその反面パーツなどがとても高価なものを使っているために量産はできずエース用の機体としようとしている。現在開発だけされている数は6機だがその内5機は改良を加えた後ロキス書記長の妹のゼスに預けようとしている。

第11話

「さあ〜って始めましょうか・・・織斑先生？」

「・・・ああ」

本来授業時間なのだが今は、千冬とニケによる模擬戦が始まるうとしていた。他の生徒達は、アリーナの席に座ったまま観戦している。現役の軍人とブリュンヒルデとの戦いを生で見ることができるとても楽しみなのであろう。

「まさか先生のことだから少しでも性能がいいラファールを使うと思っただけで打鉄でしかも近接格闘戦用装備しか使わないって・・・私なめられてます？」

「なめてなどいないさ・・・これが私には一番あっているのにな」

その対応にニケは、若干イラつきを感じ

「まあ〜どうでもいいけど。私が勝つだけだしね」

そう言うなりニケはギラトスを起動した。

「・・・あまり調子にのるなよ小娘が」

千冬は、静かにそう言いそして

『模擬戦始めてください!!』

真耶の開始の合図とともに千冬は一気にニケとの間合いをつめ切りかかるうとするがそれに対してニケは

「甘いよ！！！」

腕をあげ中に内臓しているマシンガンで迎撃する。それを上手く回避するがニケの追撃はとまらずに連射した。

「……………」

千冬はそれを回避し続ける。それを続けていくと

「ウロチヨロウロチヨロとっつとっしい！！いい加減に当たれ！！！！」

少しずつ冷静さをなくしていくそれがさらに数分続き

カチカチ

「っち！弾切れ！！」

「バカスカと撃ちすぎだ。馬鹿者が……」

そう言い今まで回避に徹してした千冬がニケの方へ向きなおし唯一の装備である刀を構え切りかかるが

「ならこれでどう！！」

ニケがそう叫ぶとその腕からグレネードが発射した。

「なっ！！まだ弾があったのか！！」

防御の構えをとるがその弾は命中し爆発した。

「あゝあ。軍人の言葉を勝手に信じるからこうなるのよ……」

軍人のニケがいくら弾が尽きたといったとしても普通であれば信じる前に疑うべきだ。これで千冬は負けただろうとニケは勝手に思ったが

「私もなめられたものだな！！！！」

煙の中から千冬が出てくると防御が間に合わずまともにもその斬激をまともにくらってしまった。

「つく！！！！！！」

そこからは千冬の連続攻撃が行われるが最初の一撃以外は的確に防ぐニケだが

「……してやる。……ろしてやる」

「ん？なんと知っているんだ」

「殺してやる！！！！よく私の機体に傷をつけたな！！！！」

今までのニケとは明らかに雰囲気が一変したため一度距離をとろうとした千冬だが

「逃がすか！！！！！！」

ニケはそれを許さず両腕で挟みこんだ。そしてその際普段は両腕についている刃は収納しているがそれを出しそのまま挟んだ。

「なっ！！！」

「・・・やあ〜っつと捕まえた」

そう告げるニケの目は狂喜したような感じをしている。だが千冬は、それよりもシールドがきちんと働いていないことに気づいていた。

「どうしてシールドがきちんと作動しないんだ！！！」

「それはね？この武器がシールド無効化機能を付いてるからですよ」

そう言いながら挟んでいる両腕にさらに力を加えると

「ぐっ！！！！！！」

ギシギシと打鉄のフレームが軋む音が響く。そして刃がある部分はずでにヒビが入り始めている。

「あははははは！！！すごいですね〜あの反逆した女達はすぐに悲鳴をあげたり命乞いしたのに織斑先生はまだまだもつんですね」

パキパキとあちこちにヒビが入りこれ以上続ければ確実にフレームは破壊されてしまうと千冬は考えていた。さらに刃の部分で切断されるのではとだが千冬は、こんな状態でも対応した。二ヶに対して蹴りをくわえるとそのせいで腕の力緩みその間に脱出した。

「はあはあはあはあ……」

だがすでに千冬は息があがり打鉄はボロボロでさらに一部フレームが完璧壊れているところさえもあった。だが、それでも刀は二ヶに向けられた状態のまままだそれにはさすがの二ヶでもすごいと思ったのか。

「へえ。そんな状態なのにまだ私と戦うつもりなんですか」

「はあはあ……当たり前だ馬鹿者」

「何でそこまでがんばれるんですか？」

「……私は、どんなに恨まれてもいいだがな。これ以上命との……家族の繋がりを切りたくないんだよ」

「……勝手な考えですね」

「ああ、私の身勝手な考えだ。私のせいで命は傷ついたというのにな」

「そう。そこまで判つても勝気なんですね……なら徹底的に

潰してやる……!」

そう言うとニケはもう一度挟みこもうとし千冬は刀を構えるとそこへ

「ニケそこまでやめておけ」

「大佐!？」

イオがトロイアを纏いニケをクロスサイフォスでその動きを止めていた。

「これ以上続けるといっているのであれば私が相手をする」

そう告げるとニケは

「……判りました大佐の言うとおりにします」

ギラトスをそのまま待機状態にした。

「織斑先生。ニケが迷惑かけてしまいすまなかつた。」

「……いや。特に気にしてはいないさいオ先生。ニケは、軍人としては当たり前前の行動をとっただけだろう」

「……」

イオはそのことに何も反応をしめさないまま

「では、二ヶこの件に関しての反省文を今から書いてもらおう」

「な、何ですか大佐!？」

「今のお前は軍人ではなくただの一般性とだ理由がどうあれ教員との死闘を見逃せない」

そう言つとその二ヶの首根っこを掴みずると引きずってアリ
ーナを出て行く。

第11話（後書き）

眠い状態で書いたのでこれも反応を見て書き直すかもしれません

第12話

アメリカ軍基地に出頭していたボルキユスとレトは夕方ごろになつてからIS学園に戻ってくるが戻つてイオにそのことを言いに行くとなぜか涙を流しながら書類を書いているニケがいたがあえて気にしないことにした。その後は、今日ニケがしたことを報告されたが僕としては特に何もしないがいくら僕達のISにはリミッターが掛かっているからといって死闘はしないように釘はしたがその際のニケがなぜかとてもおびえた顔をしていたが気にしない。

その後レトは、イオの報告書の整理の手伝いをするために別れ僕は自室に戻ることにした。自室に戻り今着ている軍服を脱ごうとした時にドアを叩く音がし

「誰ですか？」

「わたしだよーぼーちゃん」

この独特な喋り方でこんな愛称をつけて呼ぶ人物は

「布仏さんでしたか。今開けますますね」

ドア開けるとクラスメイトというよりは唯一のこの学園での対等な友人と呼べる布仏 本音がいた。本音だけはボルキユスに対して普通に会話してきた人物だった。

「それよりも布仏さん。そのぼーちゃんと呼ぶのやめてもらえませんか？まるで春日部にいる鼻水がでている園児を思い出しますので・・・それとどうしたんですか？」

「え〜ぼーちゃんは、ぼーちゃんだよ〜。今日来たのはね〜これから織斑君のクラス代表就任パーティーやるからぼーちゃんも一緒にいこ〜」

呼び方を変えるつもりはないようですね。まあ、もういいでしょう。それよりも

「ふむ・・・私が参加してもいいのでしょうか？他の皆さんは私のことを怖がっているみたいでしたし私がいけば周りの空気を壊しかねないですよ？」

現在ボルキュスという存在は一部の者達からすれば特にクラスメイト達には恐怖の象徴とされているまああれだけのことをしたただそれは当然といえば当然なのかもしれないが

「大丈夫だよ〜そんなの気にしないで一緒にいこ？」

「はあ〜。わかりました行きますからそんな目をしないでください」

そう言いボルキュスは、軍服を直し本音と食堂に行くところではすでに盛り上がり過ぎておりその中心であろう人物はやはり一夏であった。そんな中ボルキュスの姿を見つけたほかの女生徒達は今まではしゃいでいたのをやめそのままボルキュスのほうを見ていた。

ボウキュスはそのことに対してはまったく反応を示さずに本音に連れられ席に空いていた席についた。女子たちの反応を見て一夏もどうしたのかと思えば見るとボルキュスが来たことに気づいたがどうしたらいいのかわからなかった。そんな一夏のことを隣にいた篤は

どうしていいのかわからない顔をしていたがセシリアは何かを考えながら真剣な目つきでボルキユスのことを見ていた。

やはりかため息をつきこんな場所に長居をするのはさすがに嫌だと感じすぐにここから出て行こうとすると

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑 一夏君とボルキユス君に特別インタビューをしてみました〜！」

ある意味この空気を変えてくれるのでは思った女生徒たちからオーと言った声がでると盛り上がった。まったく何がオーなんですか。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

なぜ名刺を渡す必要があるのかわからないが一応はもらっておいた。

「ではでは、織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ〜！」

ボイスレコーダーをずいずいっと一夏に向け、無邪気な子供のように瞳を輝かせている二年の先輩をみてボルキユスはもう一度ため息をついた。

「えーっと。まあ、なんというか、がんばります」

「えーもつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか〜！」

何でそんなわけのわからないコメントを要求するのでしょうかね。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして」

「それじゃ、次はボルキュス君に質問です！！どうしてクラス代表を織斑君に譲ったのか？」

そんなことを聞くのかと内面思いながらそれに答えた。

「そうですね。一番は、経験を積んでもらうためですし。私自身忙しい身なので辞退させてもらいました」

ふむふむとメモを取るとなぜ忙しいかといったことは詮索してこなかったのはさすがのIS学園の二年生だと思った下手に聞いても機密などのために答えてもらえないと思ったのだろう。というかボイスレコーダーあるのにメモする必要があるのか？

「それじゃ、次に織斑先生を倒したというのは事実でしょうか」

「あれを倒したといえるのかわかりませんが・・・そういうことになってますね。あの時の織斑先生は何かを躊躇していた感じでしたので本来の力をだせなかったのでしょうか」

その答えにも納得したのか

「では、最後にこれは個人的にも知りたいことだからできれば答え

てほしーな」

「何でしょうか？」

「何でボルキュス君の右目眼帯してるの？できればその眼帯を取ってもらえるとうれしいかな・・・」

そう言うとボルキュスからの雰囲気が今までのものとは明らかに違うものになった。そして一夏もさっきまでの雰囲気とは違っていた。

「・・・それについては答えないことにします」

そう言うと黛はさっきまでの確に答えてくれたためボルキュスが生徒達からどういった存在とされているのかを忘れてしまった。

「え〜いいじゃない。そんな隠したりしないで答えてよ〜ね？お願い」

「黛先輩、命も嫌がってますしそんなしつこく聞かないください」

「・・・命？ボルキュス君じゃなくて命？」

そこで一夏は今の状態ではまずいと思ったが

「ねえねえ。ボルキュス君、君が織斑君に”命”って呼ばれている理由についても詳しく教えてよ〜」

そこでボルキユスはただ黙っているが黛が「ねえねえ」と何度も詮索していると

「……しつこいな」

ただそう一言つぶやくと彼から殺気のようなものが出され

「っひ!!!」

黛は、小さく悲鳴を上げてしまいが回りの女生徒達も今のボルキユスを怖がっていた。一度見たことある生徒は少しはましなのかもしれないが違うクラスの生徒は現在完璧におびえてしまっていた。

「……先輩？あまり人の過去を詮索しないことをお勧めしよう。それにこれ以上詮索するのであれば……」

「す、するのであれば？」

「……どうなっても知らないよ？」

その一言を言ったボルキユスの顔は笑顔だったがその笑顔からは恐怖しか感じなかったと後日黛は言った。そんな中セシリアは、と言いつなぜか顔を赤くしていたそうだ。

「……布仏さん私は、部屋に戻ります。誘ってくれてありがとうございます
ごぞいました」

「うんうん。また明日ねーちゃん」

「ええ。また明日」

そこで部屋に戻ろうとしたときに一夏が

「み、命!！」

「……なんですか？」

振り向きもしないで立ち止まりそう聞き返した。

「い、いや。あの、そのだ。今日はお疲れ様ってだけ言いたかっただけだ」

「そうでしたから。他には何かありますか？」

「い、いやそれだけだ」

そう言われるとボルキユスは、また歩き始め部屋に戻った。その後は何とか復活した薫がインタビューを再開しセシリアに質問しその際の質問に対して顔を赤くして何か言っていたらしいがボルキユスはそんなこと知りもなかった。先ほどのこともあったため一夏が命と呼ぶ理由には一切触れないで写真を撮って終わったそうだ。

第12話（後書き）

投稿が少し遅れました。掃除していたら昔やっていたスパロボのM
Xが出てきたのでやっていたら思いのほかやりすぎてました。（や
っぱりゼオライマーいいなあ〜）ついでに今日ブレイクブレイドの
10巻買ってきたのですがなぜか最終的にボルキユス（命）の死亡
フラグしか思いつかなかったです・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3514v/>

I S 織斑家の弟

2011年8月13日08時29分発行